

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	富田剛司教授送別の辞
別タイトル	Farewell Professor Goji Tomita
作成者（著者）	堀, 裕一
公開者	東邦大学医学会
発行日	2020.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 67(1). p.14 15.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2019_052
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD66092766

富田剛司教授送別の辞

堀 裕一

東邦大学医療センター大森病院眼科教授

富田剛司先生、このたびは眼科学講座（大橋）の教授ご退任おめでとうございます。そしてお疲れ様でした。

富田剛司先生は、岐阜県大垣市のご出身で、幼少時より優秀でいらっしゃる、岐阜大学教育学部附属中学校、県立岐阜高等学校から岐阜大学医学部へご入学と、岐阜における超エリートコースをまっしぐらに進まれました。昭和55年3月に岐阜大学医学部医学科を卒業され、のちに岐阜大学学長にご就任される早野三郎教授が当時主宰しておられた眼科学教室に入局されました。昭和59年には大学院を修了しておられます。

富田教授のご専門である緑内障との本格的な出会いは、昭和60年1月より岐阜大学眼科学教室の教授となられる北澤克明先生との出会いだと思います。北澤先生は緑内障に関する世界トップクラスの研究・臨床を数多くご発表してこられた方で、ご自身そしてその門下生たちの業績により、「岐阜は緑内障のメッカ」といわれるようになりました。富田教授も例にもれず、北澤門下生として次々と研究成果を発表され、昭和61年に岐阜大学医学部眼科講師に就任後、昭和61年から63年まで米国ボストン・タフツ大学医学部眼科、平成4年から5年まではフィンランド、ヘルシンキ大学眼科にそれぞれご留学されて、さらにご研究の幅だけでなく、現在まで続く人脈を大きく広げられました。

富田教授の東京進出は、平成11年10月に東京大学大学院医学系研究科感覚・運動機能医学講座眼科学へ助教として赴任された時から始まります。留学中から着手されていた、「緑内障における画像診断」の研究を本格的に始動され、視神経乳頭の構造変化の解析を最新の検査機器を駆使し、次々と新しい概念をご発表されてこられました。平成

19年5月からは東邦大学医療センター大橋病院眼科教授にご就任され、教室を主宰する立場として、緑内障診療・研究をさらに大きく発展させられました。

緑内障は、我が国における失明原因一位の疾患ですが、早期に発見し、早期から治療介入を行えば、決して怖い病気ではありません。そのためには、いかに早期に診断できるかが鍵となります。富田教授がライフワークとしてこられた「緑内障の画像診断」は、国民の視力を守るための最前線に位置する大変重要な研究テーマであると思われます。これまでの多くの業績により、富田教授は、2017年の第71回日本臨床眼科学会において、名誉ある特別講演（演題名「緑内障視神経乳頭の不思議に迫る」）をご担当されました。特別講演では、富田教授ご自身のこれまでの研究のストーリーが、そのまま世界における緑内障の画像診断の歴史のご紹介となっており、大変わかりやすく、とてもワクワクするご講演でした。

富田教授は、教授就任中にたくさんの門下生・お弟子さんを育てられました。これからは彼ら富田門下生たちが、日本そして世界の緑内障研究の最先端を走ってくださることと確信しております。富田先生、これまで長い間本当にご苦勞様でした。これからは趣味の釣りを楽しみながら、我々東邦大学3病院の眼科学講座の活躍を見守っていただき、ご指導いただければ幸いです。

最後になりましたが、富田剛司教授のお仕事を長年にわたって支えてこられました奥様ならびにご家族の皆様今後の益々のご活躍とご健勝を祈念してこの稿を終わりたいと思います。富田教授、本当にお疲れ様でした。そしてありがとうございました。



図：富田剛司教授の第71回日本臨床眼科学会での特別講演（演題名「緑内障視神経乳頭の不思議に迫る」）における，ご講演直後の記念写真（2017年10月14日，東京国際フォーラム）